

初期アメリカ新聞漫画について

柴田元幸

百年前のアメリカにおいて、新聞漫画は文化の花形でした。特に、日曜版では、まるまる1ページを使った、フルカラーの作品が紙面を飾り、まだ映画もテレビラジオもなかった当時、いまの日本でいえば朝の連続テレビドラマ小説のような人気がありました。新聞の売れ行きも、漫画に大きく左右されたので、人気漫画家の引き抜き合戦のような事態もしばしば生じました。

なかでも、今日もお評価が高いのは、Gustav Verbeek, *The Upside Downs of Little Lady Lovekins and Old Man Muffaroo* (1903-5); Winsor McCay, *Little Nemo in Slumberland* (1905-14; 1924-26); Lyonel Feininger, *Kin-der-Kids* (1906); George Herriman, *Krazy Kat* (1913-44); Frank King, *Gasoline Alley* (1918-) の5作です。

グスタフ・ヴァービーク (1867-1937) は長崎の生まれで、父親は長崎で宣教師を務め、その後明治政府の下で大学設立などにも尽力したガイド・フルベッキ (1830-98)。8コマ漫画が実は16コマ漫画という驚異的な「さかさま漫画」も、ひとつには日本伝統のさかさ絵もヒントになっていたのではないかとされています。

ウィンザー・マッケイ (1871?-1934) の *Little Nemo in Slumberland* (眠りの国のニモ) のタイトルは、言うまでもなくジュール・ヴェルヌ『海底二万哩』のネモ船長と、ルイス・キャロルの *Alice in Wonderland* を踏まえています。夢の国を描いたその絵の美しさは、漫画史上最高と言われています。マッケイはまた、アニメーションの初期作家としても大変重要です〔この点については、この話のあとに刊行された細馬宏通『ミッキーはなぜ口笛を吹くのか—アニメーションの表現史』新潮選書に詳しい〕。

ライオネル・ファイニンガー (1871-1956) は、*Kin-der-Kids* と、*Wee Willie Winkie's World* の2作品を1906年に描いていて、どちらも大変斬新な傑作なのですが、あまり人気を得られず連載は数か月で中止となり、ファイニンガーはその後ドイツにわたってパウハウスの中心的芸術家の1人となります。正直言って、漫画家だったときの方が革新的だと思いますが(笑)。彼に限らず、これら現在もっとも評価の高い漫画家たちは、当時の人気はおおむねいまひとつで、もっと人気があったのは、ストーリーも日常生活に材をとり芸術的にも穏健な作品でした。ファイニンガーたちは、漫画界の純文学作家のような存在だったと言っていいかもしれません。

ジョージ・ヘリマン (1880-1944) の *Krazy Kat* (1913-44) は、おそらく『眠りの国のリトル・ニモ』以上に評価の高い作品で、これまた当時の人気はいまひとつでしたが、新聞王のウィリアム・ランドルフ・ハーストに愛されて長年連載が続きました。そのなかで、男とも女ともわからないネコと、そのネコにレンガを投げつけるのが生き甲斐のネズミと、そのネズミをつかまえて牢に放り込むのが生き甲斐の犬とをめぐるとの漫画は、どんどんシュールな様相を帯び

ていきました。

フランク・キングは1883年生まれで1969年に亡くなりましたが、その代表作 *Gasoline Alley* という漫画はいまも続いています。アメリカの新聞漫画ではよくあることなのですが、別の漫画家が作品を引き継ぐのです。現在はもう4代目です。いまでは個々の新聞漫画に与えられるスペースも昔とは較べものにならないくらい小さいので、今日の『ガソリン・アレー』にキングがやっていたころのようなスケールと芸術性は望むべくもないですが。

新聞漫画が登場したのは19世紀の末ですが、少なくとも日曜版フルカラーといった華々しい形は、その20年前には不可能でした。カラー印刷の技術の飛躍的な進歩があったからこそ、それも可能になったわけです。その技術は、今日、印刷業をされている方々にこれらの漫画を見ていただくと、「今ではこんなことはとてもできません」というくらい手間のかかった高度なものです。優秀な技術陣に加えて、のちの時代であれば映画やテレビに流れていったかもしれない芸術的才能、ビジュアル面のみならずストーリーテリングにも長けた才能が新聞漫画に集中していたと言っても過言ではありません。逆に、新聞漫画の黄金時代が1900年代～1910年代と比較的早く終わってしまったのは、その後はさまざまな才能が、主として映画業界に流れていったことも一因だと言えるでしょう。

これだけすぐれた作品が、毎週アメリカ中の家庭で読まれていたにもかかわらず、アメリカ文化が幅広く論じられるなかでいまだ認知度が低いように思えるのは、ひとつには、これらの漫画がもっぱら大衆新聞に載り、『ニューヨーク・タイムズ』や『ヘラルド・トリビューン』といった知識人向けの新聞にはいっさい載らず、したがってインテリの目に触れる度合いが少なかつたことも一因だと言われています。

以下、時間の許す限り、これら新聞漫画の最高峰に位置する作家たちを紹介していきます。

まず、『ラヴキンズちゃんとマファルーじいさんのさかさま物語』という作品。主人公は女の子とお爺さんの2人ですが、絵を引っくり返すと女の子がお爺さんになり、お爺さんが女の子になります（図版1）。さっきも申し上げたように、さかさ絵というのは日本にもあるし世界中で多くの先例があるわけですが、ヴァービークがすごいのは、1コマの絵ではなく、6コマ×2のストーリー漫画になっている点です。ヴァービークが週1本のペースで、これを2年間続けたというのは、信じられない凄さだと思います。それに加えて、言葉まで逆さまにしても読めるようにした驚異的な回もありますが、この手法はさすがに3回続いただけで挫折しました（笑）。

ヴァービークの漫画は、森の中や別世界で人間が不思議な生き物に出会うという、方向性としては現実から幻想に向かうものが多いです。そもそもこの時代のアメリカ新聞漫画では、「幻想」、「夢」、「別世界」が鍵言葉になることが多いように思います。

しかし最終回は、例外的に現実世界を描いています。大きな兵隊たちが小人たちを攻めに行こうとしているところを目撃した主人公たちが、小人たちの味方をして彼らにそれを知らせに行くという話です。これが描かれたのは1905年の1月頃、つまり日露戦争の真ただ中で、明らかにロシア（大きな兵隊たち）ではなく日本（小人たち）を支持しているわけですが、最後

に2人は「戦争は嫌だなあ」と言って平和な国へ行くことにします。日本を応援するという以上に、厭戦感が前面に出ていると思います。

アメリカの新聞漫画でもっとも評価の高い作品と言えば、誰もが『眠りの国のリトル・ニモ』と『クレイジー・キャット』を挙げますが、まずはウィンザー・マッケイの『リトル・ニモ』をご紹介します。

ウッドロウ・ウィルソン大統領も愛した作品と言われますが、非常にファンが多い作品です。現代で言うと、僕も何冊か作品を翻訳している作家スティーヴン・ミルハウザーも大ファンの1人でして、作者ウィンザー・マッケイの生涯を題材に小説まで書いていて（「J・フランクリン・ペインの小さな王国」）、これは中篇集『三つの小さな王国』（白水uブックス）に入っています。イタリアにフェデリコ・フェリーニという偉大な映画監督がいますけれども、彼の『女の都』という映画も『リトル・ニモ』を踏まえていると言われます。後半のエロチックで幻想的な夢の描写などはたしかに、『リトル・ニモ』の世界をフェリーニらしくいっそうセクシュアルにしたバージョン、という印象を受けます。

物語はまず、眠りの国の王様モルフェウスが、お姫様の遊び友達として主人公のニモを眠りの国へ呼び寄せるところから始まります。しかしニモは道中いろんな障害にあってなかなか眠りの国に辿りつけません。この「障害」が物語の核を成しているわけです。

最初は同じ形のコマが並んだオーソドックスな形態でしたが、マッケイはじきにそれでは飽き足らなくなり、真ん中に巨大な丸いコマを置いたり、ビジュアル的にも凝りはじめ、色遣いもより綺麗なものになっていく。怖い生き物もたくさん登場しますが、それをつねに、グロテスクであると同時に美しさも備えた姿に仕上げています。このマンガは何年も続きましたが、毎回かならず夢オチです。最後のコマではニモがベッドで目が覚めるというスタイル、これだけは頑なに変わりませんでした。

こちらはアメリカの新聞漫画の中で一番有名な場面かもしれませんが、ニモたちが「迷いの間」に入っている場面を見てみましょう（図版2）。この回でやっていることはごく単純で、歪んだ鏡のように人物たちを引きのばしたり縮めたりしているだけですが、色づかいや構図も優れていて、いくら見ても飽きません。

そしてこのあと、火星に行く何回も続いた長いエピソードがありますが、ここで展開される文明諷刺はとても辛辣です。ニモたちが火星へ行くと、「安価物件多数」とか、「一等地住宅街」「家賃におさらば」「空に家を持つ」とか、そこらじゅうに看板が立てられている。どうやらある業者が火星のすべての土地と空間を買い占めていて、お金のない人は住む家も空間も持てないらしい。それだけではなく、言葉も買わないと使えず、貧乏人は喋ることもできないわけです。

貧乏人は場所もなく混雑した世界の中でゴチャゴチャと生活していて、ある回では満員電車のような乗り物が描かれています。ぎっしりすし詰めになっていて……まあ東京の通勤電車も大して違わないかもしれない（笑）、この火星のエピソード全体がほとんど今日の日本の諷刺に読めます。

1910年当時、文学で前面に出ていたのはジャーナリスティックな小説でした。「マックレーキング」と言われたりもしますが、企業や政治の腐敗を糾弾する、そうしたジャーナリズムと文学の狭間に行くような作品が非常に多く、夢幻的な世界を描くマッケイも、ある程度そういう流れの中で生きていたことが作品に反映されていると思います。

彼はこのように素晴らしい漫画を書いた人でもありますが、先ほど述べたように、同時にアニメーション映画の草分けでもありました。このことは彼が歴史的に重要な存在とされているもう1つの理由です。当時アニメ制作に明確な分業はなく、マッケイの場合も1人で何千枚もの絵を描いて数分のアニメをつくるというやり方でした。また彼は演芸場でものすごい速さで漫画を描くという芸も行なっていて、その世界でもスターでした。

(——ここまで来て時間が尽きましたが、以下、残り2人についてもごく簡単に触れておきます。)

『クレイジー・キャット』のジョージ・ヘリマンも、斜めに傾いたコマを使用したり、コマごとに色づかいが変わったり、とビジュアル的にきわめて斬新です。背景にはメサと呼ばれる切り立った岩石丘があって、そのあとにコマごとに色が変化する砂漠が広がる、というのが基本構図ですが、これは作者ヘリマンが親しんでいたアリゾナ州ココニーノ郡の風景に基づいています(図版3)。このように現実と幻想の絡め方がヘリマンは実に独特です。『クレイジー・キャット』は言語的にも凝っていて、登場人物たちはいろんな訛りや方言をごっちゃに盛り込んだ実に不思議な英語を喋ります。

フランク・キングの『ガソリン・アレー』は、中年男ウォルトが家の前に置き去りにされていた赤ん坊を仕方なく育てるという、今日紹介したなかでは一番日常性の高い作品ですけれども、まだ赤ん坊のスキージクスがふいに1人で歩き出して、服を脱いで湖に飛び込み、すいすいと泳いでいって牛から直接乳を飲み、ザーっと泳いで戻って来て、自分で服を着て寝る——要するにウォルトが昼寝のなかで見た夢というわけです——と、日常のなかに夢や幻想が巧みに盛り込まれています(図版4)。フランク・キングは紅葉の季節、ハロウィーンなどにも毎年何かしら幻想的な作品を、いわば年中行事のように描いています。

これらの漫画は、アメリカの漫画の原点、と言われたりもしますが、この言い方には多少ためらいを覚えます。なぜなら、技術的にも、芸術的にも、この時代の新聞漫画を超えるものはほとんど出ていないからです。原点ではあるかもしれませんが、と同時に、一気に最高のレベルに達しているのです。

THE UPSIDE-DOWNS OF LITTLE LADY LOVEKINS AND OLD MAN MUFFAROO • THE FAIRY PALACE •

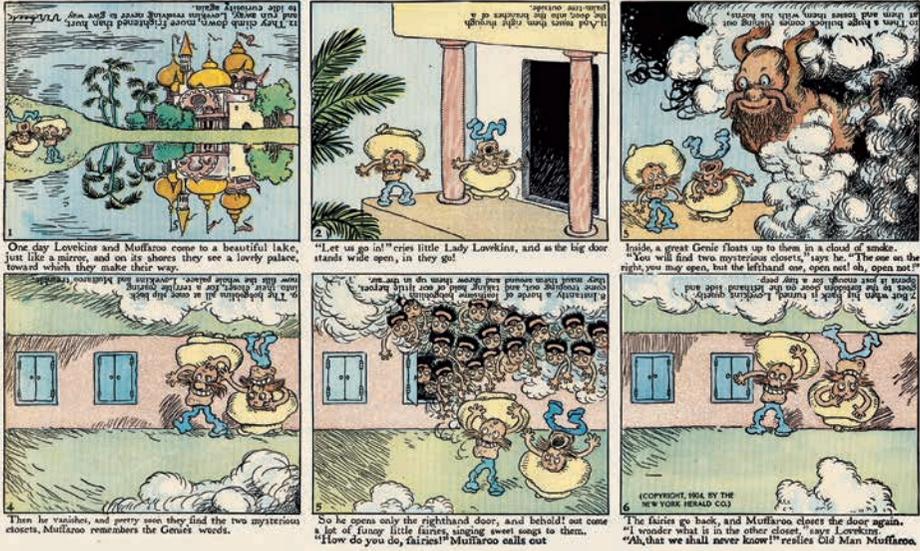


图 1

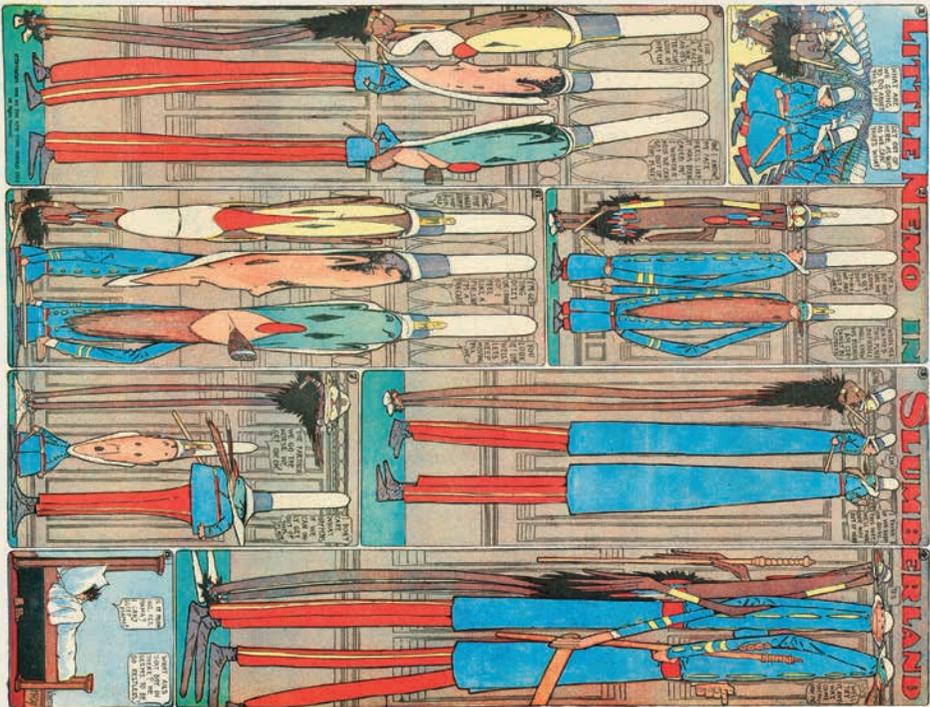


图 2

